

クラスの女子と 一緒に着替え

官能小説集 1

クラスの女子と一緒に着替え

主婦にローションでなめられ

混浴で誘惑

エロ本屋

男棒入れよう

我慢させた弟に犯させる

気軽に性行為する時代

生活指導室で女教師と

痴漢なのに女の人

電車で顔射

夏に近所のお姉さんと

電車で先輩に尻コキ

スクール水着姿にぶっかけ

オナニーセルフ撮影

ブルマの男の子をなでまわす

機内でスチュワーデスさんと

授業中に隣の男の子を

双子の男の子と

弟とむつみあい

母親に迫られて

体験版

R-18

二角レンチ

目次

クラスの女子と一緒に着替え	3
夏に近所のお姉さんと	10
主婦にローションでなめられ	15
電車で先輩に尻コキ	25
混浴で誘惑	30
原作利用権について	35
奥付	37

クラスの女子と一緒に着替え

体育の授業のあと、僕は女子と一緒に着替えることになった。

クラスの女子たちは、ときどきこうしてクラスの男子を着替えに誘うことがある。男の子の裸を見たり触ったりしたいからだ。お礼に手で射精させてくれる。

今までそうして女子と一緒に着替えをした男の話では、すごく恥ずかしくてすごく気持ちいいそうだ。僕は期待に胸がはちきれそうだった。

体育が終わった。僕は女子に手を引かれて、女子たちが着替えに使っている教室へ入った。

クラスの女子がみんないる。体操服とブルマ姿の女子たちは、それだけでとても刺激的だった。体育の授業の間ずっと男子は女子のブルマや太股を見ている。僕もいつもたくさん目に焼き付けて、家でオカズにしていた。

今日ははじめて、ブルマの下まで見られる。女子の下着姿は想像するしかなかったのに、今日はそれを直に見られる。

しかも女子は最後に手でしごいて射精させてくれるという。どんなに気持ちいいのだろう。したことがないからわからない。でも経験した男の話だと自分でするのとまるで違う気持ちよさらしい。

教室は机を端のほうに寄せて真ん中を開けてある。僕はそこへ連れて行かれる。真ん中で、女子たちの見守る中、全方向から生着替えを見られる。それはとても恥ずかしいことだった。

「それじゃあさっそくはじめようか。私たちも脱ぐから君も脱ぎなよ」

女子の一人がそう言うと、みんな一斉に服に手をかけた。

すごい。女子たちがみんな僕の目の前で脱いでいく。笑いながら、少しだけ恥じらいながら、それでもためらわずに脱いでいく。

体操服から脱ぐ子もいれば、ブルマから脱ぐ子もいる。どっちも刺激的だ。かわいい下着が露わになっていく。中にはあらかじめ見せるつもりだからか大人っぽいセクシーな下着をつけている子もいる。

すごい。ものすごくいやらしい光景だ。僕はあっという間に限界まで勃起した。体育用の短パンが窮屈なくらいだ。すごくオナニーしたい。すごく射精したい。

僕が見とれている間に女の子が服を脱ぎ終わった。みんな下着姿だ。僕は周りを見回し、一人一人を存分に見て目に焼き付けた。

「たっぷり見た？ もう十分かな。じゃあ次ね」

女の子が言うと、みんな一斉にブラに手をかけた。するりと外して胸が露わになる。

な、なんで着替えなのに下着まで脱ぐんだ？

僕が戸惑っている間に女の子たちはパンツに手をかける。それをするりと下ろして足を上げて脱ぎ取った。

足を上げるとオマンコが見えそうだ。まだ本物を見たことがない。僕は思わず身を乗り出してのぞき込んだ。

後ろから二人の女の子に肩をつかまれ引っ張られる。

「駄目駄目。あとで見せてあげるからさ。その前に、君も脱がないと。もたもたしてると時間なくなっちゃうよ」

「見たいんならさ、見てていいよ。私たちが脱がしてあげるから」

僕の正面の女の子が机に尻をのせて股を開く。足を上げて広げ、股間を丸見えにする。

これがオマンコ。うわ。すごい。ネットの画像とはいやらしさが違う。きれいな形だ。それに画像で見たより色が薄い。すごくきれいなオマンコだった。

僕がオマンコに見とれていると、女の子が数人僕を取り囲んで服に手をかけた。

裸の女子たちが僕の服を脱がそうとする。右を見ても左を見ても裸ばかり。おまけに前を見れば足を広げてオマンコを見せてくれる女の子。すごくきれいだ。いやらしい。もう僕のペニスははちきれそうなくらい大きくなっていた。

女の子が僕の体操服を脱がせる。手や胸が当たる。すごくやわらかい。女の子ってこんなにもやわらかいんだ。

女の子が僕の短パンに手をかける。急に恥ずかしくなる。でも何を言う間もなく脱がされる。

「えへへ。すごく大きいね。興奮してるんだ」

女の子がパンツの上から僕のペニスをなでる。すごい気持ちよさだ。ちょっとなでられただけでこんなにも。直にさわられたらどれほど気持ちいいんだろう。

女の子が僕のパンツに手をかける。恥ずかしい。女の子にペニスを見られるのがすごく恥ずかしく思えた。

「ま、まって。何で、着替えで全部脱ぐの」

僕はつい抵抗する。このときになって急に、思っていたよりはるかに恥ずかしいことに気づく。

「なんでって。射精させてあげる約束でしょ。パンツはいてたら出来ないじゃない」

「男の子を裸にするんだから、女の子も裸じゃないとかわいそうでしょ。私たちだって恥ずかしいんだよ。でも君だけ裸はかわいそうだからこうしてみんな脱いであげてるんじゃない」

「何いまさら恥ずかしがってるのよ。ほら、みんな見てるよ。見せなさい。えい」

女の子が笑いながら僕のパンツを下ろす。僕のペニスはみっともないくらい大きくなっていて。上向きに反り返りびくびくと脈打つ。

「おお、出た出た」

「わ、けっこう大きいね」

「そう？ 彼氏のに比べたら小さいよ」

「あんたの彼氏は大きすぎなの。これくらいなら大きいほうだよ」

女の子たちが僕のペニスを見つめながらはしゃいでいる。恥ずかしすぎて顔が熱い。一番恥ずかしい勃起したペニスを裸の女の子たちに見られている。

女の子たちが手を伸ばして僕のペニスを触ってくる。

「うっは。やっぱ大きいよ」

「硬い。むちゃくちゃ硬いじゃない」

「もう先っぽからお汁垂れてるよ。いやらしいの」

「元気ね。びくびくはねてる」

女の子の手ってなんてやわらかいんだ。温かくてすべすべでぷにぷにで。むちゃくちゃ気持ちいい。

というか気持ちよすぎる。やばい。もう。

「だ、駄目。触らないで。もう。出ちゃう。出ちゃうからあ」

「あははは。何言ってるの。これくらいで出るわけじゃない」

「そうよ。そんなにも早漏な子、今までいなかったよ」

「まだしごいてもないのに。出ないって」

「大丈夫大丈夫。我慢我慢。くすくす」

女の子たちは笑いながら、僕のペニスをなでるのをやめない。亀頭を手のひらでなでられる。カリ首に指を這わせてなでられる。竿を指先でなでる子は三人もいる。玉までもまれて。もう。もう。

「あ。駄目。本当に。本当に出るって」

じたばたと暴れても動けない。女の子たちが僕の腕をつかんで押さえていた。裸のやわらかい胸が腕や背中に押しつけられている。女の子とはいえ数人に押さえつけられては逃げようもない。

「はあ。うわ。出る。あ」

僕は射精してしまった。堪えられない。僕のペニスを触っている女の子たちの手に精液がぶっかけられる。

「わ。本当に出た」

「うそ。ありえない。早すぎ」

「すごく熱い。たくさん出てる」

「ああ確かに。量はすごいね」

「この早さは論外でしょ。こんなんじゃ、彼女かわいそう」

彼女なんていない。それどころか女の子とつきあったこともない童貞だ。なぜだろう。女の子は誰かとつきあってセックスしてるのが当たり前みたいな口ぶりだ。

それにしても。すごい気持ちよさだ。オナニーなんかとは比べ物にならない。快感が桁違いだ。こんなに気持ちいい射精があったなんて。今まで想像もできなかった。

「うっわ一手べとべと。もう。あれくらいで射精しちゃうなんて情けないよ」

女の子たちはぶつぶつと僕をののしる。え。僕、そんなにも言われるほど早すぎるの？

男のプライドが粉々にされていく。女って怖い。

「ねーどうする。これで終わる？」

「えー、ぜんぜん遊び足りないよ」

「残り時間でもう一回射精とか無理かな」

「できるんじゃない。こんだけ早ければ」

「じゃあもう一回射精させようよ。今度はたっぷり触ってしごいてさ」

「そうだね。そうしよう」

「それにしても。ぷぷ。こんな早いのが笑えるね」

「ねー、今までの子でこんな早いのがいなかったものね」

女の子たちはひどいことを言いながら僕の全身をなではじめた。

裸の女の子たちが一斉に僕の身体を触ってくる。

さっきみたいな指先で軽くなでるのではなく、手のひらを使ってぐりぐりとなでたりもんだりしてくる。

今まで知らなかった快感を次々知らされる。首や背中が触って気持ちいいなんて考えたこともない。でも女の子に触られるとぞくぞくするほど気持ちいい。

誰かが僕のお尻をもんでいる。お尻の割れ目に指を差し込み尻の穴までなでてくる。これが本当に気持ちよすぎる。トイレでお尻を拭いても何も感じないのに。女の子の指でなぞられるとふるえるほど気持ちいいなんて。

乳首がすごく尖っている。すごく感じている。ここがこんなに気持ちいいなんて。絶対思いもよらない。乳首気持ちいいのって女だけだと思っていた。男でもこんなに感じるんだ。

竿を握ってしごかれる。うわわ。すごい気持ちいい。自分でしごくのとなんでこんなに違うんだ。快感が違いすぎる。こんなの知ったらもう、オナニーしても気持ちよくなれないんじゃないだろうか。

先走りに加え、射精した精液を亀頭に塗りたくられる。亀頭を握られドアノブを回すようにひねられる。うわわ。ぞくりとくる。すごい快感だ。なんだこれ。むちゃくちゃ気持ちいい。

玉を優しくもまれる。少しでも強くされたら痛い。女の子はそれをわかっているからすごく優しくもんでくれる。温かい。全身をもみくちゃにされる中で唯一優しい快感だった。

ペニスにぐぐっと力がこもる。大きく膨らみ反り返る。

「あ、もう出るみたいよ」

「うそ。早い」

「え。二回目で一分持たないって。どれだけ早漏なのよ」

「しかたないわよ。どうしようもないもの」

「まあね。じゃあ気持ちよく射精させてあげますか」

みんなの手が激しくなる。たしかに二回目なのにすごく早い。僕って自覚がなかったけど早漏なんだ。女の子の口から聞かされるとなんだかすごくショックだ。

でもそんなことでめげていられる状況じゃない。快感が果てしなく高まってくる。激しくしごかれ、射精感が猛烈にわきあがる。

「うう。ふうう。出る」

少しでも長持ちさせようと思い切り踏ん張った。でも無理だった。女の子の手は気持ちよすぎて射精を堪えるなんて出来はしない。

射精する。僕のペニスをしごいている数人の手に白濁した粘液が大量に噴きかかる。きれいな手を汚していくその光景はとてもしやらしくて、僕はますます興奮しながら射精する。

それにしても。女の子の手で射精させられるのは本当に気持ちいい。なんでこんなに気持ちいいんだろう。もうたまらない。幸せすぎる。

僕の射精が終わると、女の子たちはみんな笑いながら僕から離れた。

「あーおもしろかった」

「この短時間で二回も射精できるなんて。他にいないよ」

「これが早漏か。私こんなに早いのはじめて見たよ」

「私も。というかここまで早いのは普通じゃないよ」

「こんなの彼女本当にかわいそう。セックスでイかせてもらうの無理じゃない」

「本当に。あはははは」

女の子たちはみんな僕を馬鹿にして笑っている。今は気持ちよさで幸せだから気にならない。でもきっと後で思い出すたびすごくへこむだろう。

女の子が一人、僕に近づいてきた。手に持ったティッシュで僕のペニスについた精液を拭き取ってくれる。

「あ、ありがとう」

「別に。いいものを見せてもらったし。楽しかったよ」

この子も他の子と同じか。女の子って口が悪いなあ。普段はそうでもないのにここぞとばかりに男を馬鹿にする。女って怖い。

「みんな悪気はないの。その場のノリで言ってるだけだから。気にしないほうがいいよ」

あれ。この子優しいな。それにすごくかわいい。かわいい子が僕のペニスを拭きながら優しくしてくれる。なんだかうれしくてさっきまでよりドキドキしてきた。

「あのさ。僕彼女いないんだけど。なんでみんな僕に彼女がいるって思っているの」

女の子はきょとんとしている。

「だって君、顔は悪くないじゃない。性格も普通だし。頑張ればとくに彼女くらい出来てるでしょ」

え。そういうものなの。僕なんの努力もしてないんだけど。あれ。僕が変なのかな。彼女作る努力ってみんな普通にしているものなのかな。

「ところでさ。君、早漏。本当早いよ。なおしたほうがいいよ」

「そ、そうなのかな。自分ではそう思ってなかったんだけど」

「早いよ。本当。……ね、よかったら、私が鍛えてあげようか」

どきりとした。彼女がほほえんでくれている。気のせいかな顔がほんのり赤い。

「そ、それはうれしいけど。い、いいの？」

「いいよ。じゃ、また後でね。ほら。もう時間ないよ。早く着替えないと」

彼女はそう言って向こうへ行った。僕はしばし呆然とした。

早漏をなおすために鍛えるって、やっぱりエッチなこととして射精を我慢するってことだよな。

あのかわいい子が。たとえ馬鹿にされまくった僕への哀れみだとしても、エッチなことをこれからもしてくれる。

やばい。すごくうれしい。楽しみすぎる。

ただひとつだけ問題が。僕は期待ではちきれそうなくらい勃起してしまったものをどうしたらいいのかわからなかった。

(完)

夏に近所のお姉さんと

僕は小さな頃から仲のいい、近所のお姉さんに手を引かれていた。お姉さんの様子はいつもと違っていた。いつもやさしいのに、今日は強引に手を引っ張って、僕を道から離れた林へ連れ込もうとしている。僕は怖くなって聞いた。

「お姉さん。どうしたの。怖いよ。引っ張らないで」

お姉さんは僕の手を引っ張って前を歩いていた。僕を振り返らずに言った。

「怖くないよ。いいこと教えてあげる。私も最近知ったんだけどね。男の子がすごく喜ぶこととしてあげる」

僕は怖かった。なんだかわからないけど、なんとなく恥ずかしいことだというのはわかっていた。どんなことか具体的には知らないけど、エッチなことだというのはわかっていた。

でも。いつも優しくかったお姉さんが。こんなに強引に、僕が断れないような雰囲気僕を林に連れ込もうとしている。すごく怖かった。何をされるかわからないのが怖かった。やさしくないお姉さんを見るのがはじめてで、知らない人みたいなのが怖かった。

林の中を少し歩いてお姉さんは立ち止まった。田舎の道のわきに生い茂る雑木林。真夏の日差しが木々に遮られ、涼しかった。

お姉さんは僕を振り返った。笑っている。見たことのない表情で笑っている。口を閉じてにんまりと笑っている。怖い。今まで見たことのないお姉さんが怖い。知らない人みたいで怖い。

お姉さんは白のワンピースを着ていた。真夏の暑さで汗をかいていた。服が汗ではりついて透けていた。ブラもパンツもうっすらと透けて見えていた。とてもエッチな格好だった。僕は勃起してしまった。

この時の僕はまだオナニーを知らなくて、恥ずかしいとき勃起するけどそれをどうするか知らなかった。お姉さんは僕の勃起を見てうれしそうに笑った。そして僕の服に手をかけ脱がそうとした。

僕はおびえてやめてと言った。でもお姉さんはじっとしてなさい、心配しないで。怖いことはしないから。と言ってやめてくれなかった。

それでも僕がやめてと言っているとお姉さんは急に大きな声でどなった。

「じっとしてなさい、気持ちよくしてあげるから。いいわね」

僕はお姉さんに怒鳴られたのははじめてで。怖くて。すごく怖くて。おとなしく脱がされた。

パンツまで脱がされた。服は側の木の枝に放り投げるようにひっかけられた。僕は靴をはいているけれど、それより上は何も着ていないという恥ずかしい格好にされた。

さっき怒鳴られたのが怖くて、僕はもうお姉さんに逆らわなかった。

後にして思えば、僕はこうなる前に泣きわめいて、お姉さんの手を振り切って逃げ出すこともできた。

僕はいつもと違う様子のお姉さんが怖かったけれど、同時にエッチなことに対する興味もあった。だから怖がりながらも心のどこかでお姉さんにされることへの期待があった。その期待で、怖いのに僕はすごく硬く勃起していた。

お姉さんは両手で僕の両手首をつかんで、勃起を隠させてくれなかった。しゃがみこんで、間近で僕の勃起をまじまじと見つめた。

僕はお姉さんに、女の人に勃起を見られてすごく恥ずかしくて、それでよけいに硬くなった。

「ねえ、射精したことある？」

お姉さんが聞いた。僕は知らなかったので無いと答えた。

お姉さんは、ここの先からおしっこでなく白くてドロリとしたものが出てすごく気持ちいいことだと教えてくれた。僕は想像もつかなくて困惑した。お姉さんは僕が戸惑っているのを見て笑った。

「じゃあ教えてあげる」

お姉さんはそう言って、僕のをくわえた。

それは衝撃的だった。だって。そんなところをくわえるなんて。考えたこともなかった。僕は知らなかった。女の人がそんなことをするなんて知らなかった。

お姉さんの口の中はとても熱くて。湿っていて。柔らかくて。とても気持ちよかった。

僕は生まれてはじめての快感に、思わず大きな声をあげた。自分のものとは思えない、聞いたことのない声だった。こんないやらしい声が自分の口から出たことにびっくりした。

お姉さんは僕の両手をつかんでいて、僕は身動きできなかった。気持ちよさで腰をくねらせた。お姉さんはそれでも口を離さなかった。

お姉さんの口の中で舌が動きまわっていた。僕のをなめ回していた。なめられたところはどこも気持ちよかった。後でお姉さんに教えてもらった、カリ首というところを舌でぐるりとなぞられるのが一番気持ちよかった。

僕はあまりの気持ちよさに叫んでいた。気持ちいいとか、もっととか、頭で何も考えられなくて、とにかくずっと叫んでいた。

お姉さんはそれを聞いてますます激しくしゃぶり、なめまわした。口一杯に含んで、思いっきり吸われると腰が抜けそうだった。

僕はなかなか射精しなかった。お姉さんは、たぶん精通もまだだったからなかなか出なかったのだろうと言った。実際、はじめての射精のあとはすぐに射精するようになった。

射精するまで長い時間がかかった。その間僕は気持ちよすぎる快感をずっと与えられ続けた。とっくに射精するところまで高まった快感が、射精しないせいでずっと続いた。

それはあまりにも辛かった。射精と同じくらいの快感が、何分も休むことなく与えられたのだから。

僕は気持ちよすぎて気が狂いそうだった。よだれをこぼしながら絶叫し続けた。お姉さんはお姉さんで、僕をなんとか射精させようと意地になり、どんどん激しくした。

どんどん巧みに、より気持ちよくした。だからよけいに辛かった。気持ちよすぎてたまらなかった。

何分も快感地獄を味わって、ようやくこみ上げてきた。僕が生まれてはじめて経験する、得体のしれない何かが。

今までの気持ちよさとは違う快感がこみ上げてくるのを感じた。亀頭の先端、おしっこの出るところに気持ちよさが集中して、今まで以上の快感だ。

何か出そう。これがきっと、さっき教えてもらった射精なんだ。最高に気持ちよくなって、白くてドロリとした液体が出るんだ。精液が出るんだ。はじめて射精しちゃうんだ。

僕は気持ちよすぎてとっくに泣いていた。でもまた涙があふれた。はじめての射精に対する期待と恐怖がまじってわけがわからなくなっていた。

僕が出そうと言ったから、お姉さんはより一層激しくしゃぶって絞りだそうとした。もうあちこちなめたりせず、口をすぼめて思いっきり吸いながら頭を前後に大きく動かした。

強く吸いつけながら口でしごかれる。それはとんでもなく気持ちよかった。

とうとう僕は射精した。お姉さんの口の中に。僕はそのあまりの気持ちよさに腰が引けた。お姉さんは僕の両手を握っていた手を離し、腰をつかんで逃げられないようにした。

僕は自由になった両手でお姉さんの頭をつかんで引き離そうとしたが無駄だった。力が入らなかった。気持ちよすぎて力がこめられなかった。

精液が尿道を通り先端からあふれる。その精液が通るところがとても気持ちよかった。これが射精の快感。のけぞりそうなほど気持ちいい。僕は絶叫しながら射精した。

気持ちよすぎて逃げ出したいのにお姉さんは僕の腰を離してくれない。口を離してくれない。僕は最高の快感を最後まで味わわされた。気持ちよすぎて拷問だった。

お姉さんは僕の射精が終わるまで口を離さなかった。でも口を離すとすぐ地面に精液を吐き出した。

口からあふれ出る大量の精液。白っぽいが真っ白ではない、変に濁った色。ドロリとした大量の精液が口からあふれ垂れ落ちるのはとてもいやらしかった。

あんなに大量の精液が僕の身体から出たなんて信じられない。僕の身体からあんなものが出るなんて信じられなかった。

「気持ちよかった？」

お姉さんが息を切らせながら聞く。僕はうなずいた。

僕はよだれと涙でぐしょぐしょの顔や、精液と唾液でべとべとのものをお姉さんにハンカチで拭いてもらった。そして服を着た。

お姉さんは僕にセックスまでするつもりで脱がしたらしい。でも僕が口でなかなかイかないせいで疲れてしまった。僕がセックスやオナニーを教えてもらったのはもっと後のことだった。

お姉さんは最後に、誰にも言わないことを僕に約束させてから別れた。もう僕はお姉さんを怖がっていなかった。ただ明日から、もっと気持ちいいことをいろいろ教えてくれるというので期待して浮かれていた。

こんな気持ちいいことがあったなんて。知らなかった。クラスのみんなも知らない。僕とお姉さんだけの秘密。それともみんな知らないふりをしているだけで、僕のように誰かに教えてもらっているのかもしれない。

このときは浮かれていたので考えていなかった。お姉さんは誰に教えてもらったんだろう。僕以外の誰とこういうことをしているんだろう。それは後に嫉妬となった。

僕はこうしてお姉さんにいろいろな気持ちいいことを教えてもらったが、同時にいろいろといやな感情も知ることになった。これが大人になるということだと理解するのはまだ先のことだった。

(完)

主婦にローションでなめられ

若い主婦たちが、裸でいそいそと準備していた。床に敷いた大きなシート。ローションが床につかないようにしている。ローションまみれの裸がてかっついていやらしかった。僕は全裸でギンギンに勃起させながらその様子を見ていた。

この主婦たちはみんな若かった。みんな二十台前半で、僕よりいくつか上だった。それにみんな美人だった。みんな小さな子供がいる。子供を産んだとは思えないほどスタイルもよかった。

この主婦たちは、僕の家近所にある公園によくいる主婦仲間だった。僕はたまに見かけたらあいさつしたり、ちょっとした世間話をしたりする程度の仲だった。公園で彼女たちが愚痴を言い合っている間、子供たちと遊んであげることもあった。

悪い人たちではない。だから誘われたときはびっくりしたけれど、ひどいことはされなかった。だから話に乗った。

若くて美人で、よい夫とかわいい子供に恵まれた幸せな主婦たち。でもやはりストレスはたまる。育児は大変で、夫は忙しくてあまりかまってもらえない。公園で集まって愚痴を言い合っているくらいでは解消されないいろいろな不満がたまっていた。

それを解消するために、若い男の子と遊ぶことを思いついた。セックスしたら浮気になってしまう。夫は裏切れない。でも年下の若い男の子の身体をちょっとなでたりなめたりするくらいならいいじゃないか。

仕事で疲れた夫はあまり抱いてくれない。性的不満を解消するには、浮気にならない程度のちょっとエッチなことをしないとすっきりしない。僕は近所に住む、秘密をきちんと守れそうなおとなしい男の子。格好の相手だった。

僕は女の子とエッチしたことがないから、その誘惑を断れなかった。彼女たちにとっては他愛もない遊びだが、僕にとっては女の子の人とはじめてエッチなことができる、とてもドキドキするものだった。

彼女たちはみんな美人だ。かなりレベルが高い。これで断れる男なんていやしない。今日が約束の日だ。みんなの都合のいい日に主婦の家へ集まって、みんな裸になった。

セックスはしない、いやなことはしない、そういう約束だった。かわりにもし、僕がしたくなくてもセックスをねだらないことも約束させられた。でも僕は、流れて初体験をすませることになるのをちょっぴり期待していた。

今日集まった主婦は四人だった。僕をいれて五人全員裸だった。すごい光景だ。僕は遠慮も忘れてじろじろと見た。みんな美人で、スタイルがいい。誰でもセックスしたくなるようないい身体だった。僕はものすごく興奮してはりさけそうなほど勃起していた。主婦たちはそれを見てくすくす笑っていた。

タオルや飲み物なども用意してあった。他にもごちゃごちゃといろいろな物が置いてあった。僕はその中にコンドームが何箱かあるのを見つけて内心喜んだ。セックス駄目って言っていたけれど、もしかしてさせてくれるのかもしれない。期待に胸が躍った。

準備ができて、主婦たちが手招きした。すべって転ぶと危ないので、四つん這いでこっちへ来るよう言われた。僕は犬がえさに駆け寄るみたいにはあはあいいながら四つん這いで主婦たちのところまで行った。床にしいたシートはローションでぬるぬるで、僕は滑ってひっくりかえらないように気をつけないといけなかった。

間近で見ると圧巻だった。スタイルのいい女の裸がこんなにきれいでいやらしいなんて。みんなローションまみれで座っていた。ローションがつかないように髪を結んであげていた。いつもと違う髪型がきりっとして格好よかった。とても素敵だった。

若くきれいなお姉さんたちと、公園で話をするだけでもうれしかった。それがこんなことになるなんて。未だに信じられない。

たくさん触りあいをするときは、ローションを使うほうがいと教えてくれた。肌触りが気持ちよくなるし、こすれて痛くならない。たくさん触っても平気だ。乾いてきたらまたたっぷりとつけ足せばよい。

僕の正面にいる人が、僕の手を取って自分のおっぱいに押し当てた。ほら遠慮しないで。好きに触っていいのよと言った。あまりの柔らかさに手がとろけそうだった。僕は両手で鷲掴みにして激しくもみしだいた。

それをきっかけに、女の人たちが僕の身体に群がった。手をのぼしてあちこち触る。肩から腕、背中から腰、太股からひざまでなめらかになる。ローションですべるやわらかい手はとても気持ちよかった。

勃起したペニスを触ってくれない。わざとじらしているのだ。僕は待ちきれなかった。触ってとおねだりした。でもみんなくすくす笑うだけで触ってくれなかった。

そうして何分たったのだろうか。僕が胸をもんでいた女の人が、このおっぱいではさんであげようかと言った。僕は頭を激しく上下させ、こくこくとうなずいた。

僕の腰を床につけ、別の人が背中を支えた。背中に当たる胸の感触がたまらない。そうして僕は女の人に身体をあずけるようにして股を開いた。前の女の人が、股の間に入り大きな胸を近づけてきた。

ついに僕のペニスが胸にはさまれた。はじめて女の人に触られた。それがいきなり、ローションまみれの大きくやわらかい胸だ。この極上の気持ちよさはまさに天にも昇るといえるものだった。

女の方は手でおっぱいを動かして僕のペニスをしごきあげた。むちゃくちゃ気持ちいい。ローションで濡れた胸は動かす度にその間から空気が漏れて、じゅぷり、じゅぷりととてもひわいな音をたてた。

うわわ。気持ちいい。僕は声をあげずにはいられなかった。すると横にいた女の人が僕の口を自分の口でふさいだ。はじめてのキス。なのにいきなり舌を入れてきた。ぬるりと舌が入ってくると、これもすごく気持ちよかった。キスがこんなにいやらしくて気持ちいいものだということをはじめて知った。

背中から胸を押しつけて、僕の胸をなでまわす人。僕にキスして口の中をなめまわす人。僕のペニスをパイズリして気持ちよくする人。そして最後の一人は、僕の空いてる手を取って、自分の胸をもませていた。

気持ちよすぎる。こんなの耐えきれない。でも少しでも長くその快感を味わいたくて、力んで射精を堪えた。いつもならとっくに射精しているところを、何十秒か我慢した。でもさすがにもう限界だった。

僕は射精した。大きなおっぱいにはさまれて、その間から噴水が吹き出すように勢いよく射精した。飛び出た精液が、パイズリしている女の人の顔にかかる。それはすごくひわいな光景だった。彼女はにっこり笑いながら目を閉じて、精液を浴び続けた。

他の女の人がきゃーきゃー言っている。すごーい。たくさん。勢いあるね。気持ちよさそう。いろいろ言われて恥ずかしかった。

僕の射精が終わると、次は私と言って、僕の手で胸をもませていた女の人が僕のペニスをつかんだ。そしていきなりくわえた。

射精直後の敏感なペニスをかまわず強く吸いたてた。そのバキュームは強烈で、僕は今射精したばかりとは思えないほど硬くなった。

別の人はずるい、私もと言って食いついてきた。二人で僕のペニスを奪いあいながら貪っている。すごい光景だ。今日見るのはどれも新鮮ですごすぎる光景ばかりだった。交互にくわえて吸ったかと思えば一人が亀頭をくわえて一人が竿をなめた。一人が根本までくわえて一人が玉を口に含んで舌で転がした。

気持ちよすぎる。でも射精したばかりでまだまだ射精しそうにない。後の二人が僕の左右の手を取って自分のオマンコに指を入れさせた。熱い。中はとろけそうにやわらかくて熱い。すごく濡れていた。ローションだけじゃない。中から熱い汁があふれてきていた。膣の中はなんて気持ちいいんだ。これ絶対、ペニスを入れたらものすごく気持ちいい。

二人は自分のオマンコを僕にいじらせながらキスをしてきた。左右から交互にキスをする。舌を入れてかきまわす。ほほをなめ、耳をなめ、耳の穴に舌を入れてきた。こんなの考えたこともない。耳の中に舌を入れられるのはすごく気持ちよかった。

僕は二人にキスされ、二人にフェラされていた。最高だ。なんて気持ちいいんだ。ビデオでこういうのを見たことはある。でも全然違う。ここまでの気持ちよさは、見ているだけでは絶対に想像できない。想像もつかない気持ちよさ。実際に経験しないとわからない途方もない快感。

僕は一回射精したあととはいえ、こんなにも気持ちいいのに射精しないことにおどろいた。後で聞いたのだが、こうして交互に責めると、連続して責め続けるのと違い交代するわずかな間で射精感が少しおさまる。その結果気持ちいいのに射精するまで高まらないから長持ちするというのだ。

僕は長い時間責められたあと、いよいよ射精がこみ上げてきた。僕がふんばって堪えているのがわかると、一人がくわえて激しく吸い立てた。もう一人が玉を口に含んでなめあげた。

あああ。気持ちよすぎる。僕はあまりの快感に耐えきれず射精した。女の人の中にとぼとぼと大量に噴き出した。女の方は射精を口で受け止めながら手で竿を激しくしごいた。あああそれ。たまらない。ひい。気持ちよすぎる。

僕は二回目の射精の快感を長く味わい、ようやく全部出し切った。口に出した女の方は、さすがに飲んではいくれないようだ。

口をあけてだら一っと精液をこぼした。胸にかかり、お腹をたれていく白く濁った精液はすごくひわいで興奮した。

僕はそのあと、二人の女の人に身体を触られていた。二人とも胸や太股を押しつけてきて気持ちよかった。

二人はぴったり並んで寝ころんで、僕を招いた。体重をかけても大丈夫よと言うので、僕は二人にのしかかった。二人は僕の足に両足を絡めて、僕の腕に両手を絡めた。ぬるぬるとローションまみれで僕の腕と足をしごきあげる。僕は気持ちよさに浸って幸せだった。

ふと顔をあげると、別の人がゴムを手にとって持っていた。もう一人も手にゴムを持っている。やった。セックスだ。セックスさせてくれるんだ。僕は期待でペニスを硬くした。

でも違った。ゴムを持った二人は、それぞれ自分の人差し指と中指の二本をまとめてゴムにかぶせた。

僕の下で、腕と足をからませていた二人がぐっと力をこめる。両足で僕の足を締め上げる。両腕で僕の腕を締め上げる。僕は身動きが取れなくなった。

「な、何するの。やめて」

いやなことはしないって約束してくれた。やめてと言ったらやめてくれるはずだ。なのに女の方は言った。

「大丈夫よ。言ったでしょ。気持ちいいことしてあげるって。怖いことはないから安心してね」

指にゴムをつけた二人は、僕の後ろへ回った。そしてゴムをつけた指をぴたりと僕のお尻の穴にくっつけた。

お尻の穴がこすられる。ローションをつけているのでなめらかにすべる。僕は思わず声をあげた。何だこれ。気持ちよすぎる。お尻の穴が触られるのがこんなに気持ちいいなんて知らない。トイレで尻を拭くとき何も感じないのに。女の方の指でいじられるとこんなに気持ちいいなんて。

指にゴムをつけた二人は交互に僕のお尻の穴をいじる。気持ちよさに身をよじろうとしても、両手両足をがちりつかまれていてほどけない。僕は情けないあえぎ声をあげるしかなかった。

お尻の穴をいじっていた指が、ぴたりと止まる。そしてゆっくりと沈めてきた。お尻の穴に、指が入ってきた。ゴムをつけた二本の指が、ローションのおかげで滑るように侵入してきた。

はあん。気持ちよさに声が出た。甲高くて甘ったるくて、まるで女の子みたいな声だった。僕は自分からそんな声が出たことにおどろいた。

女の人たちはみんな息を荒げていた。はじめの年上ぶった余裕のかわりに興奮していた。男の子のお尻を犯していることに興奮していた。

触ってかわいがるってこういうことだったのか。聞いてない。こんなの聞いてない。でも抗議を言おうにも、僕の口からは快感のあえぎ声しか出なかった。だってお尻の穴をいじられるの気持ちよすぎるもの。

「この子すごいねー。もう感じまくってる」

「普通もっとしてからでないと感じるようにはならないらしいのに。いきなり気持ちよくなってるじゃない」

「これなら入れても大丈夫じゃない」

「そうだね。一番小さいのなら大丈夫かも」

「入れてみようよ」

「そうしよう」

「うん。決定」

何だ。何を言っているんだ。もう指を入れている。これ以上何を入れるっていうんだ。

女の人が持ってきたものを見て、僕は血の気が引く思いがした。その手には、女の人のお尻につけるバイブみたいなもの、いわゆるペニバンがあった。

「駄目。やめて」

僕は弱々しく抵抗した。でもまだお尻に入れられた指をぐりっとねじ込まれると、快感にあえいだ。

「ほら。気持ちいいんでしょ。もう指じゃ物足りないんでしょ。もっと太いの入れて欲しいんじゃないの」

そう言われて僕は否定できなかった。僕の意に反してペニスが期待でガチガチになっていた。身体はペニバンを入れられるのを求めてうずいていた。

女の人が腰にペニバンをつけて、ゴムをかぶせていた。たしかに小さかった。僕のペニスの半分もない。力を抜いていけばけがしないからと優しく言われた。

ゴムをかぶせ、ローションをたっぷりまぶしたペニバンの先端が、僕のお尻の穴にあてがわれた。みんな僕の処女喪失の瞬間を、固唾を飲んで見守っていた

他ならぬ僕自身が、それにすごく期待していた。なんで。こんないやなのに。なんでこんなに興奮し、期待するんだろう。さっきお尻の穴を指でいじられたときは気持ちよかった。だから期待してしまう。怖さよりも、よりすごい快感が得られることに期待してしまう。

先端がゆっくりとめりこんできた。犯される。僕、本当に犯されちゃう。射精しそうなほど興奮した。でも出ない。

おどろくほどあっけなく、根本まで入った。小さいから僕が力を込めなければつるんと入った。気持ちいい。あああ。これすごく気持ちいい。

僕が気持ちよくなっているのを確かめると、女の方はペニバンをゆっくり動かした。出し入れする度にお尻の穴が熱くなる。ローションでぬるぬるしたこれは痛みもなかったただただ気持ちよかった。射精していないのに、射精よりも気持ちいい。僕が気持ちよさにあえいでいるのを聞いて、周りでささやいている声が聞こえた。

「一番小さいとはいえペニバンだよ。全然痛がらないね」

「処女でも痛がらない子いるから。この子もきっとそうなんだよ」

「えー。もしかしてさあ。この子オナニーのときお尻自分でいじってるんじゃない」

「そうか。きっとそうだよ。この子お尻を自分でいじる変態なんだよ」

違う。僕は自分でお尻をいじったことなんてない。でも口から出るのは否定の言葉ではなく、気持ちよさにあえぐよがり声だった。たしかに。なんで痛くないんだろう。なんでこんなに気持ちいいんだろう。

処女でも痛がらない子はいる。僕もそうなのか。ローションつけているからか。ペニバンが小さいからか。それとも。僕の身体がいやらしいからか。

女の人たちは興奮して次私、とか早くかわってとか言っている。でも僕を犯している人はもうちょっとと言ってゆずらない。

女の方は射精しない。じゃあどうしたら終わるんだろう。

そう考えていた矢先、急激にこみ上げてきた。僕は出ると思う間もなく射精した。何だこれ。いつもの射精と全然違う。勢いよく噴き出すのではなく、勢いなくどろりとあふれた。出すというより漏れるという言い方がぴったりだった。僕はお尻を犯されて精液を漏らしてしまった。

ものすごく気持ちいい。今までの射精の中で一番気持ちよかった。今日はじめて経験したパイズリもフェラも信じられないほど気持ちよかったのに、それよりさらに気持ちよかった。

僕の射精を見て、僕を犯していた女の人はようやく僕のお尻からペニバンを引き抜いた。そして腰からそれはずすと次の女の人に渡した。受け取った女の人はいそいそとゴムをつけかえ、ローションをぬりたくって僕のお尻に入れた。

入れられた瞬間、また熱くて気持ちよくなった。射精したのとは関係なく、お尻の穴は気持ちいいままだった。僕が気持ちよさに喜んでいるのを見て、僕の手足を押さえていた二人が離れた。僕は四つん這いになり、身をよじり、思い切り悶えた。

セックスさせてもらえることを期待してきたのに。全然違った。でも気持ちいい。これ絶対セックスより気持ちいい。僕は涎をたらしながら大きな声であえいだ。それを聞いた女の人が、ペニバンをもっと早く動かした。気持ちいい。それ気持ちいいよお。

僕はたまらなくなかった。また急にこみ上げた。全然予想もつかない。あっという間にこみあげて射精する。勢いなくどろりと漏れる。僕はまた精液を漏らしてしまった。

それを見てペニバンが引き抜かれる。この抜かれる瞬間がまた気持ちいい。どうやら僕が射精したら交代することになったようだ。次の人がペニバンをつけて、また僕に入れた。

こうして女の人は四人とも、僕を後ろから犯した。全員に射精させられ、とても気持ちよかった。こんなに気持ちいい射精ははじめてで、でもまだまだいけそうだった。

僕は仰向けになると、もっと欲しいとおねだりした。ペニスはガチガチに勃起したままだった。漏らした精液にまみれてびくびく脈打っていた。女の人たちはそのひわいな光景にごくりとのどを鳴らすとまたペニバンをつけた。

さっきは後ろからだったから今度は前から。僕は寝そべって両足を自分で抱えてお尻に入れられるのを待った。本当に女の子になった気分だった。ビデオで見た女の子みたいな格好をして穴に入れられるのを待った。

入ってくる。この体勢だと丸見えだ。なんていやらしいんだ。女の人が裸にペニバンをつけた姿はとてもいやらしかった。それを僕にゆっくり入れてくる姿がとてもいやらしかった。女の人に犯されて喜んでいる僕はとてもいやらしかった。自分のいやらしい身体に興奮した。

女の人みんなやり方が違った。優しい人、激しい人、キスしながらする人。胸をもませながらする人。

僕のペニスをしごきながらお尻を犯されるのはひどく気持ちよかった。でも何度も射精しているからなかなか射精しない。女の人たちは僕のペニスをしごき、僕がよがるのを見て笑った。僕が精液を漏らした後、ペニバンを抜いてから僕のペニスを軽くしゃぶってくれた。

もう何もかもが気持ちよすぎた。僕は気持ちよすぎて何度も射精し、涙と涎で顔がぐしゃぐしゃだった。

また全員一巡した。みんな僕のお尻を二回ずつ犯した。これで終わりだ。僕はほっとした。さすがにイきすぎて疲れはてていた。

でも終わりではなかった。寝そべった僕の顔にオマンコをおしつけてきた。最後に全員を気持ちよくしなさいと言われた。

もう限界なのに。これ以上イくのは怖い。なのにまたお尻にペニバンを入れられた。さらに一人が僕のペニスをしゃぶる。お尻とペニスを同時に責められ激しい快感に悶えた。二人とも激しかった。本気で僕をイかせようとしていた。射精しすぎてなかなかイかないが、それでもまたイかせられる予感がした。

僕がなめてオマンコを気持ちよくしないとやめてくれない。きっとイきすぎて気絶するまでやめてくれない。それはとても恐ろしいことだった。僕は必死になって顔に押しつけられているオマンコをなめ回した。

さいわい、さんざん興奮していた女の人たちはすぐイってくれた。僕の下手ななめかたでも夢中でしゃぶりついているうちにイってくれた。三人がイった。残りは僕にペニバンを入れている人だけだ。

でもその人はとても残酷なことを言った。

「私はいいから。この子もう一回イかせるよ。みんな手伝って」

僕は恐怖の叫びをあげた。もうイくのは怖かった。さっきから責められてもイかない。気持ちいいのにイかない。イかせるにはもっとうんと責めて無理矢理絞り出させるしかない。その射精の強烈さは、きっと今までの比ではない。予感があった。とんでもない快感の予感があった。

もうくたくたで力が入らなかつた。それでも二人が僕を押さえつけ、キスをした。一人がペニスをほおばってもものすごい勢いでしゃぶってきた。今日された中で一番上手な人が、童貞相手に持っている最高のテクで責め立てる。こみ上げてくる。どうしようもなくこみ上げてくる。もう射精は無理だという限界から、さらに絞り出される。

お尻に入れたペニバンが激しく動く。お尻からも快感が押し寄せる。お尻の快感で精液が漏れそうだ。ペニスの快感で射精しそうだ。

僕は必死に我慢したが、童貞が女二人の本気の責めにかなうわけがない。僕は尿道をかけあげる射精感におののいた。

出た。すごい勢いで出た。今までの漏れ出す射精と違う。気持ちいいフェラで搾り取られ、勢いよく射精した。まだこんなに出るのかとおどろくほどたくさん出た。くわえた口の中に大量に出した。

その快感は予想よりも強く、僕は絶叫した。あまりにも気持ちよすぎて腰がぬけた。射精している間地獄の苦しみに、それをはるかに上回る快感があった。全身から汗が噴き出す。頭が真っ白になる。気持ちよすぎてよだれが止まらない。僕は全身をのたうちまわらせながらびくびくと長い時間イっていた。

終わった。女の人たちは興奮してやりすぎた、ごめんねと謝ってきた。僕がぐずぐず泣いているのでさすがに心配しているようだ。さいわい、あんなに激しくしたのにお尻の穴はけがしてはいなかった。小さいペニバンだったからよかったのだろう。はれてしまっている。今はしびれてわからないけどトイレのたびに痛むかもしれない。

夢のような快感と、地獄のような責め苦が終わった。女の人たちは後片づけを終えた。僕の身体もやさしくシャワーで洗ってくれた。

別れ際、女の人たちはしきりにやりすぎたことを謝った。僕は簡単に許すとは言えなかった。許したら、またもっと無茶をされるかもしれない。集団で、興奮してエスカレートしていったときは本当に怖かった。

僕は、次はもう少し優しくしてくださいと言った。ペニバンはあのサイズのままで。あれがきっと僕にはちょうどいいからと言った。

もう次はないと思っていた主婦たちはぱっと顔をあげて笑顔になった。そしてうん、約束すると言った。いやなことはしないと約束をころっと忘れていたくせに。まあ結果オーライだから許せるんだけど。気持ちよかった。強烈だった。まだ童貞なのに何か、セックス以上のことをやりとげた満足感があった。

(完)

電車で先輩に尻コキ

私と先輩は部活が終わると電車で一緒に帰る。降りる駅が同じだし、部活が終わる時間は結構遅いので女一人で帰るのは危ないからだ。

先輩は背が高く肩幅が広くてかっこいい。私はいつも先輩と一緒に帰るのが楽しかった。先輩と話をしてると楽しかった。私は先輩をだんだん好きになって、先日とうとう告白した。

なのにふられてしまった。先輩は他に好きな人がいるからって。私はその日、家で何時間も泣いた。

それからしばらく私は部活を休んだ。やっぱり先輩のことが好きだった。だから告白のことは忘れて、今までどおり先輩と後輩として仲良くしようと思った。先輩も努めて告白がなかったものとしてふるまってくれた。

でもさすがに、帰りの電車では今までのようには話せなかった。頑張っても話をしても長く続かなかった。依然にあんなに楽しく、いくらでも話のできたのに。気まずくなり、一緒に帰ってくれなくなったらいやだ。私はまだ先輩のことが好きで、あきらめきれなかった。

こんなことなら告白しなければよかったのだろうか。いや、好きなのに告白しないなんて駄目だ。どうなるろうとも、好きな人に好きだと言わないのは間違っている。絶対後悔する。なんとかして、依然のように楽しく話ができるようにならなくちゃ。

でも今日は、電車が混んでいた。先輩は私の後ろにいて、向かい合っただけで話ができない。私は今日のところは気まずい会話をしなくていいことに安堵した。

次の停車駅に着いて、さらに人が乗り込んできた。先輩も後ろから押されて、私の背中に身体が触れた。そこからさらにぎゅうぎゅうと押されて、私の背中に先輩が身体を押しつける格好になってしまった。

先輩は後ろから大丈夫？ と声をかけてきた。私は大丈夫ですと答えた。先輩と密着してる。こんなにそばにいる。私はそれだけでうれしかった。

電車が動きだした。背中に当たる先輩の身体も揺れた。少しすると、背中に当たる先輩の身体がびくりと震えた。なんだろうと思ったが、すぐにわかった。

先輩の股間が私のお尻に当たっていた。ギュウギュウ詰めの満員電車で、背中が押しつけられたら股間も押しつけられる。そこが、むくむくと大きくなってきた。硬くなってきた。

先輩の股間が、私のお尻の感触が気持ちよくて大きくなってしまったのだ。私のすぐ後ろに先輩がいるから、髪の匂いとかでも興奮したのかもしれない。

先輩はしどろもどろにごめん。わざとじゃないと言った。私は大丈夫ですと答えた。

内心大丈夫ではなかった。すごくドキドキした。先輩の大きい。男の人の勃起に触れるのなんてはじめてだ。お尻に当たる感触は、想像よりもはるかに大きかった。男の人ってこんなに大きくなるんだ。すごく硬くなるんだ。

後ろで先輩がつばを飲み込む音が聞こえた。かすかに息づかいが荒くなっていた。興奮しているんだ。私のお尻に勃起を押しつけて興奮しているんだ。

はじめは電車が揺れるせいだと思っていた。でも違った。先輩は、満員電車でろくに動けないけど、たしかに自分で腰を動かしていた。電車の揺れのせいでできるくらい、わずかにだけ腰を動かしていた。私のお尻にぐいぐい押しつけてきた。

私は、この不可抗力の状況をいいことにそんな痴漢まがいのことをする先輩に幻滅した。それも告白を断った女の子に対して。私がどれだけ傷つき泣いたと思っているのだろう。その女の子に対してこんなことを。

でも、幻滅したがそれでもまだ先輩を好きだった。好きな人に痴漢されているのはたしかにショックだった。しかし私は、先輩の気持ちを自分に向かせるチャンスがきたのではないかと思うことにした。

もっと気持ちよくしたら、私を求めるようになってくれるかもしれない。私を好きになってくれるかもしれない。身体で誘惑するなんてとてもはしたない。普通ならできない。でもこれが、先輩に私を好きになってもらえる最後のチャンスかもしれない。なら恥ずかしいからと言ってためらっている場合じゃない。

私は、ろくに動けないけどお尻を動かした。円を描くように動かしたり、先輩に押しつけたりした。先輩ははじめびっくりして動きを止めたが、やがて私が先輩を喜ばそうとしているのに気づくと、自分も遠慮なくぐいぐい押しつけてきた。

先輩。気持ちいいのかな。すごく硬くなっている。ズボンの下で大きくふくらんだそれを、スカートごとにお尻の割れ目に押しつけて上下にこすっていた。

私は狭い中なんとか手を動かして、スカートをめくり上げた。パンツをはいたお尻が先輩の前で露わになった。満員で、周りの人からは見えない。目の前で見下ろす先輩にしか見えない。

先輩も狭い中、もぞもぞと手を動かした。勃起と私のお尻の間に強引に手を入れてきた。先輩の手でお尻をなでられる。それとも指で私の股を触るの？ 私はいきなりな先輩の行動にドギマギした。

でも違った。先輩は窮屈な中なんとかチャックを下ろすと、勃起したおちんちんを取り出した。それを私のお尻に当ててきた。

うそ。そんな。大胆すぎるよ。先輩の予想外の行動に私はあせった。電車の中で、勃起したおちんちんを出すなんて。しゃれにならない。こんなの本当に痴漢だよ。

私はすごく興奮した。先輩がこんなことするなんて。信じられない。周りの人がもし誰か気づいたらもうおしまいだ。どうしてこんな無茶をするのだろう。

すぐ後ろで、先輩の口は私の耳元にあった。耳を近づけていないとわからないほどかすかに、浅く激しい息づかいが聞こえた。先輩がすごく興奮している。

私は一瞬、先輩がこのまま挿入するつもりではないかと思い怯えた。私処女だし。こんなところで。避妊もできない。絶対いや。

さすがにそこまではしなかった。先輩はパンツのすそにおちんちんを差し込み、お尻の割れ目に当てがった。先輩の大きなおちんちんが直にお尻に当たる。すごく熱い。お互い汗ばんだ肌がしっとり吸いつく。

先輩はそのまま動かした。先輩のおちんちんは私のパンツとお尻に包まれていた。私は男の人に直に触られるのがこんなに気持ちいいとはじめて知った。お尻のこすられるところが熱くうずいて気持ちいい。

電車のアナウンスが聞こえる。もうすぐ駅についてしまう。そうなる人との出入りがあるからばれてしまう。私と先輩がこんなエッチなことをしているのがみんなに見られてしまう。

先輩がもう止めると思ったのに逆だった。先輩はあせって、無茶苦茶にこすりつけてきた。え。もしかして先輩。射精するつもり？

先輩の大胆さに驚きっぱなしだ。まさか射精するつもりなんて。このまま私のパンツの中に出すつもりなんだ。お尻にかけるつもりなんだ。

もう電車がついてしまう。間に合わない。でも先輩は止めない。どうしよう。どうしよう。

私が混乱していると、お尻に急に熱さがあふれた。出しているんだ。先輩が、私のお尻で射精しているんだ。

熱い。すごく熱い。おちんちんも熱いけど、これはもっと熱い。やけどしそう。ぞくぞくする。次から次へと、どんどんあふれてくる。どれだけたくさん出るんだろう。お尻がぐっしょり濡れる。お尻を伝って太股まで垂れてくるのがわかる。

電車が駅についた。先輩はあわててパンツから引き抜いた。濡れたパンツがお尻にはりついて気持ち悪い。パンツもぐっしょりと濡れていた。ドアが開く。早くしまわないと。先輩ちゃんとしまえたのかな。精液でべったり濡れて、大きなままのおちんちん。

私と先輩は駅につくと、人の流れに混ざって電車を降りた。さいわいここは私たちが降りる駅だった。私はスカートの下でお尻がどうなっているのか気になった。きっとスカートまでしみこんでしまう。早くトイレで拭かなくちゃ。

先輩は鞆で前を隠している。きっとしまうのが間に合わなかったんだ。私はおろおろしている先輩に、先にトイレに行きましょうと言った。先輩は、私にこっぴどくののしられるんじゃないかとびくびくしているようだった。

私はトイレでスカートとパンツを脱いで拭いた。スカートに少ししみこんでいた。帰ったらちゃんとしなきゃ。とりあえずはトイレットペーパーで拭いておいた。パンツはさすがにどろどろで穿いて帰れない。私の家は駅から五分程度の距離だった。そのくらいなら、ノーパンでもなんとかなるだろう。

私がトイレから出ると、先輩が待っていた。もしかして先に逃げ帰ってしまうんじゃないかと心配していた。でも逃げずに待っていてくれた。

駅を出て二人きりで歩いていた。ずっと沈黙していた先輩が、やっと口を開いてくれた。こんなつもりじゃなかった。でもとてもひどいことをした。許して欲しいと頭を下げ謝ってきた。

私は先輩のほうを向いて、笑顔で言った。

「ええ。本当にひどいことです。私すごく怖かったですよ。痴漢されるのなんてはじめてで。すごく怖かった。それも、大好きな先輩にされるなんて。ショックでした。先輩がこんな人だったなんて。すごく悲しかった」

「許せません。先輩のこと、絶対許しません。でも先輩困りますよね。私が親や学校に言ったらすごく困りますよね。退学だけじゃ済まないですよ。わかってますか。痴漢がどれほど悪い犯罪なのか」

「電車の中で。あんなことまで。先輩があんな変態だったなんて。人が大勢いる中で、おちんちん出して射精までするなんて。信じられない。女の子にあんなひどいことするなんて。許しちゃいけないですよ」

「でも私、先輩のこと好きですから。痴漢されても。ふられても。それでもまだ先輩のことが好きだから。先輩が困るような、他の人に言うのはできればやめてあげたいんです」

「でも先輩は、痴漢で変態なんです。誰かが罰を与えなきゃ。誰にも言わないなら私が罰を与えてあげなくちゃ。お仕置きしてあげなくちゃ。変態で痴漢で犯罪者の先輩を、更正させてあげなくちゃ」

「先輩が汚しちゃったから、私今、ノーパンなんです。見たいですか。触りたいですか。ほら。もう私の家につきました。私の両親は共働きだから、まだあと一時間は帰ってきません」

「家に寄って行ってください。先輩。私の言うこと聞いてくれますよね。先輩？」

先輩はぶるぶる震えて青ざめている。でも股間は、私のノーパン姿を見ることや、エッチなおしおきをされる期待で膨らんでいた。先輩ったら本当に変態なんだから。

望んでいた形とは違うけど。普通の恋人とは違うけど。先輩と結ばれる。切ることのできない絆、弱みという名の鎖で結ばれる。

私は大好きな先輩を自分のものにできた喜びに笑いが止まらなかった。先輩は私がくすくすと笑い続けるのを聞いて、どんなひどいおしおきをされるのかと怯えていた。

(完)

混浴で誘惑

混浴には二種類の間がある。身体をタオルで隠す人と隠さない人だ。

この混浴は身体をタオルで隠すも隠さないも自由なところだ。みんなそれぞれしたいようにしている。

身体を隠さない人は他人に見られてもいいし他人のを見ても平気だ。だから同じく隠さない人が集まっているところへ行き、気さくに話しかけ、楽しんでる。裸同士何も隠さず何もとりつくろわない。人がいるなら見知らぬ人とでも話をして楽しくすごす。それが幸せに生きるコツだ。

しかしそうやって幸せに過ごせる人ばかりではない。人に話しかけるのが苦手な人、人と話すのが苦手な人、裸を見せるのが苦手な人、裸を見るのが苦手な人。

そういう人はタオルで身体を隠し、浴場のすみのほうで縮こまって身体を洗っている。私は、そうやってこそこそしている男の子を探す。そして身体をタオルで隠したまま、その隣に座る。

私の隣の男の子はおどおどしている。私のように若い女が隣に座ったら平気ではいられない。でもこうしてすみでこそこそ身体を洗っている子はたいてい気弱で優しい。隣の人が座ったとたんに自分が立ち去ったら相手が気を悪くする。そう考えて立ち去ったりしない。

私は遠慮なくじろじろと隣の男の子を見た。顔はまあまあ。悪くない。身体もまあまあ。悪くない。

男の子はうつむいてじっとしている。見られるのがいやなら立ち去るなり文句を言うなりすればいいのに。それもできない気弱な子。かわいい。

私は身体に巻いていたタオルを取った。男の子がびくりと身体をふるわせる。私は手で石鹸を泡立てると、その手で直に身体を洗いはじめた。

私はなにげなく身体を洗った。私が平然としているのに加え、座った時に私は男の子をジロジロと見た。だから男の子は自分も見てもいいと認識する。はじめはちらちらと、やがてどんどん大胆にじっと見てくるようになる。

男の子は腰にタオルをのせて手で隠している。でも勃起しているのはわかっていた。そろそろかな。私は男の子にくるりと背を向けて言った。

「ねえ、背中に手が届かないの。背中流してくれない？」

ここで男の子を見て言うてはいけない。先に背を向け、こちらと目をあわせないようにしておくのがコツだ。面と向かって言えばとっさに断られてしまうが、目を見ず、さらにもう背を向けているのだ。ここまでしておいたらとっさには断りにくい。そして断るタイミングを逃したせいでさらに断りにくくなる。

こちらが背を向けているから、手で隠さなくても勃起を見られることはない。浴場のすみで、周りに誰もいない。みんな向こうでわいわい楽しく会話している。湯気もあり、向こうからこっちはよく見えない。

男の子はこちらに聞こえるほど大きな音でごくりとのどを鳴らす。手で石鹸を泡立て私の背中に両手を置いた。私が手で身体を洗っていたので、男の子が手で直に洗ってもおかしくない。むしろそうするべきだ。

男の子が私の背中をなで回す。洗っているのだがあきらかに私の肌のやわらかさを楽しんでいた。男の子は夢中になり、どんどん手の動きが早くなった。

男の子の手が肩のあたりから次第に下へ移動していった。円を描くようにしてなでまわしながら、少しずつ下りていく。私が文句を言わないかどうかびくびくしながら少しずつ手を下ろしていく。

後ろを向いているからわからないが、きっともうギンギンに勃起している。たまらない。早くそれを触りたい。

男の子はここまでくるともう、私が誘っているのに気づいていた。手で激しく私の背中をなで回した。遠慮なくお尻までなで回した。私は男の子がお尻全体をなで回せるように、腰を浮かせた。両手を床について、ゆっくりと四つん這いになった。

男の子の息がとたんに荒くなる。たまらない。どんな表情でどれだけ勃起させているのか見えないが、その興奮した息づかいで想像がつく。直に見るより興奮する。

男の子は激しく尻をなで回す。きっと四つん這いになったせいで丸見えのオマンコを食い入るように見つめている。そう考えるととても興奮して濡れる。もう待ちきれない。

「入れて」

私はぽつりとつぶやいた。男の子の手がぴたりと止まる。私の尻の上に手を乗せたまま止まる。

この子童貞かな？

この調子だと童貞かもしれない。童貞だとうれしいが、少し面倒くさい。今まで何度もこうして男の子を誘惑してきたが、童貞だとこっちがリードしてあげないと上手く入れられないことが多かった。私は男の子にずぶりと入れて欲しいのだ。荒々しくぶち込んで欲しいのだ。犯されているみたいなのが好きなのだ。

男の子は案の定少しもたついたが、私がしびれを切らす前になんとか先っぽが入った。男の子は膣の気持ちよさにうめいて動きが止まった。やっぱり童貞だろうな。指も舌も入れたことがないから、女の膣がこんなに気持ちいいものだと知らなかったのだ。今まで触れた何よりも、さっきまでなで回していた女のお尻ともまるで違う、想像のつかない気持ちよさ。

やわらかく、しっとりして、熱く、濡れている。吸いつき、うごめき、とろける。男の子が最高に気持ちよく射精できるようにできている。それが女の膣なのだ。童貞が、生で入れたらとんでもなく気持ちいいのは当然だった。

「中を出して大丈夫だから。根本まで入れてから出さない」

私がぴしゃりと言うと、はっとして男の子は動き出した。せっかくの童貞生ちんぽ、先っぽだけなんてもったいない。根本まで全部味わいたい。ほっておけば先っぽ入れたままじっとして、そのまま射精してしまう。

男の子はあわてて一気に押し込んだ。根本まで入り、男の子の腰が私の尻にぶつかる。ちんぽ全体がやわらかく熱い膣に包まれる。そのあまりの気持ちよさに、男の子は短くうめきながら射精した。一秒もたずに入れたとたんに射精した。

ああ。気持ちいい。男の子の射精はたまらなく気持ちいい。女は生で根本まで入れられ、奥で射精されるのが一番気持ちいい。女の膣だって触覚がある。ゴムをつけていると膣触りが違う。手触りよりも鋭敏に違いがわかる。はっきりいってゴムをつけてると気持ちよくない。男の子が生で膣に触れるほうが気持ちいいように、女だって生のほうが気持ちいい。

生のちんぽの膣触りは最高だ。ゴムつきなんて気持ち悪いだけだ。射精するときのどくどく脈打つ尿道も、びくびく震える竿も、かちかちに張り出したカリ首も、ほとぼしり打ちつけられる精液も、そのすべての感覚が直に伝わり快感となる。ゴムをつけていたら味わえないすべての感触が快感だった。

女は膣ではイけない。膣は感じない。そう言われている。しかしそれは女が膣を鍛えていないからだ。性感帯はどこも、何度も鍛えてやっと気持ちよさが感じられるようになる。膣といえど例外ではない。膣は気持ちよく感じるように鍛えてはじめて性感帯となる。ひだのひとつひとつで男の子の感触がわかるようになるまで鍛えなくては、気持ちよくなれないのは当たり前だ。

私は何人もの男の子の形の違いがわかるようになるまでたくさんセックスをして鍛え上げた。そのおかげでもう何もしなくても興奮だけに入れられるほど濡れるようになったし、こうして膣に入れたちんぽを締めあげその感触を味わうことでイけるようになった。

男の子は射精して、あまりの気持ちよさに震えていた。私も気持ちよくていったので、膣がぎゅううと締まる。その締め付けの気持ちよさで、出したばかりの男の子のちんぽは萎える間もなく硬くなった。

男の子はまた硬くなったので、入れたまま腰を動かし始めた。ぼそぼそと気持ちいい、気持ちいいとつぶやいている。もう夢中で、私のことなんか何も考えず、ただひたすら腰を動かした。

はっきりいって男の子はセックスが下手だ。それもこんな童貞が、めちゃくちゃに腰を振るだけで女が気持ちよくなるはずがない。

でも私は違う。膣でちんぽの感触を感じ、気持ちよくなっていくことができる。だから私は何度もいった。そのたび締めあげるから男の子もたまらない。何度も何度も射精した。

いくら湯気で向こうがよく見えないとはいえ、混浴で長々とセックスしているわけにはいかない。誰かに気づかれたら困ったことになる。

でもそんな心配は無用だった。私は気持ちよくて何度もいくし、そのときの締め付けが気持ちよすぎて男の子も何度も射精した。たくさんセックスしている満足感があるが、時間はかからなかった。男の子は何十秒かごとに射精した。たぶん五分くらいしかしていないのに、男の子は六回、私は数えていられないほどいった。

男の子はたまっていた精液をすべて出し切ると、ようやく柔らかくなったものを私の膣から引き抜いた。何度も射精して大きいままだらりと垂れたそれはものすごく卑猥だった。

私は一言とてもよかったわよと言ってそそくさと立ち去った。男の子から離れたところに座り、改めて身体を洗い始めた。

やり終わったあとも一緒にいると、男の子はおどおどして困る。

何か話さないといけないんじゃないかとか、見知らぬ女に誘われるまま犯してしまった後ろめたさとかいろいろだ。美人局じゃないかと勧める子までいる。

今まで何度もこういうことをしてきたからわかっている。終わったらすぐに立ち去るのが男の子にとって一番助かるのだ。こっちは利用して楽しませてもらったのだから、それ以上困らせるようなことはしないのが大切だった。

男の子は床に垂れた精液を急いで流して、身体をさっと洗って出ていった。もっと堂々としてればいいのに。さすがに無理か。私は膣に入った男の子の感触を思いだしながらのんびり身体を流してから湯につかった。

ああ。すごくよかった。今日は久々に当たりだった。男の子に生でさせるために、混浴には安全日にだけ行くようにしていた。面倒をさけるために、浴場も毎回かえていた。そうして来たところで、めぼしい男の子がいるとは限らない。こうして男の子を楽しめるのは何ヶ月に一回程度しかなかった。

混浴で、人に見つかるかもしれないぎりぎりのところで、見知らぬ男の子を誘惑する。短い時間で激しいセックスをする。そんな普通ではないセックスが、たまらなく興奮して気持ちいい。

やめられないな。これは。

私はそんなことを考えながら、湯船にゆっくりとつかり疲れをいやした。

(完)

原作利用権について

原作利用権は、アイデアを原作として利用することができる権利です。

原作として利用するというのは、このアイデアをもとにしてあなた自身のアイデアで改変し、あなたが用意した絵などの素材で作品を作ることです。

アイデア以外の絵などの素材を利用することはできません。

例外として文章はアイデアそのものを述べたものであるため、必要に応じて一部あるいは大部分を使用することが出来ます。そっくりそのまま使うのではなく、あなた自身のアイデアで改変して使用してください。

本作品に収録されているすべてのアイデアは原作利用権付きです。

本作品を購入した人は誰でもそれを原作として、自由に改変した上で自分の作品を作ることができます。

体験版などの無料で提供したものには原作利用権は付いていません。

原作として使用する際に一切の連絡、許諾、契約はいりません。

原作として使用する際は、原作者名を記載してください。原作、原案、アイデア提供など呼称は何でもかまいません。

原作：二角レンチ

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

原作、原作者および他のあらゆる人、物、団体等に対して貶める、損害や迷惑を与えるなどの行為を禁止します。

原作として使用することにより生じる一切の問題や損失、賠償等に対し原作者は責任を負いません。

原作を使用する人は、すべて自己責任で使用してください。

原作者はその原作を用いて作られた作品に対し、利用規定に反しない限り一切関与しません。作品内容に口を出すこともなければ、その作品から得た利益に対し分け前を要求するようなこともありません。

この原作は公開されたものです。そのため、未発表の作品のみを募集する賞などには使えません。

この原作はすべて自分で考えたオリジナルですが、既存の作品と似ていないという保証はありません。アイデアというのは世界中の誰かが同じことを考えているものであり、完全に誰のアイデアとも似ていないアイデアというのは存在しないためです。

原作の著作権を放棄しているわけではありません。この原作を使用して作った作品の著作権はその作成者にありますが、原作の著作権は原作者にあります。

奥付

この内容を無断転載、複製して配布するなどの迷惑行為を禁止します。

この内容を閲覧、利用するなどして生じるあらゆる問題、損害等に関してこちらは一切の責任を持ちません。すべて自己責任で行ってください。

収録されている作品はすべてフィクションです。実在の人物、団体、事件等には一切関係ありません。

作品名

クラスの女子と一緒に着替え 官能小説集1 体験版

発行日

2011年8月31日

著者

二角レンチ

ブログ・連絡先

<http://originalmagazine.seesaa.net/>